

氏名	石田賢司
学位の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	甲文第86号(文部科学省への報告番号甲第316号)
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2010年3月3日
学位論文題目	<b>紀海音の浄瑠璃の研究</b>
論文審査委員	(主査) 教授 森田雅也 (副査) 教授 細川正義 教授 永田雄次郎 林久美子(京都橋大学教授)

## 論文内容の要旨

石田賢司氏の学位申請論文「紀海音の浄瑠璃の研究」は、豊竹座の初期の座付作者紀海音(寛文三年(一六六三)～寛保二年(一七四二))の浄瑠璃作品における文芸価値を評価することを目的としている。

序章は、紀海音が同じ時代に竹本座の座付作家として活躍していた近松門左衛門がいたために常に近松と比較され、現在では一般的に近松に劣ると評価されているが、当時の資料からは紀海音は近松のライバルとして活躍し、彼の作品も観客から支持されていたのは事実であることを報告している。

第一章は「宝永正徳期の紀海音の浄瑠璃」と題している。第一節「歌舞伎と海音の浄瑠璃」では歌舞伎狂言『心中鬼門角』と紀海音の浄瑠璃『袂の白しほり』を表現方法から比較し、紀海音が語彙の一つ一つ注意深く使用しながら、それらの働きによって登場人物の感情が深く表現されていることを確認している。第二節「浮世草子と海音の浄瑠璃」では、紀海音の『甲陽軍艦今様姿』が浮世草子『当世信玄記』を題材としていることを新たに指摘し、紀海音の趣向における解釈を深めている。第三節「竹本筑後掾の後継者問題の豊竹若太夫」では紀海音が作品を提供した豊竹若太夫について見ている。浄瑠璃界の第一人者竹本筑後掾が没した後、その後継者として若太夫が取り立てられたことを時系列的に述べている。

第二章は「享保期の紀海音の浄瑠璃」と題している。第一節「『鎌倉三代記』における執筆方針」では紀海音『鎌倉三代記』が浮世草子『頼朝三代鎌倉記』を題材としていることを検証している。さらに、紀海音によって作り出された趣向に関して解釈を深めている。第二節「『愛護若疇箱』における模倣翻案態度」では、まずその上演年代を再検討している。その結果、享保三年秋ごろに上演されたものと推論している。紀海音にとって、享保期は円熟した独創期と認められているが、それにも例外があり、先行作品に大いに影響されていることを確認している。第三節「『義経新高館』の行動方針と文芸表現」では、登場人物の行動指針を近世の視点から理解し、従来の紀海音の評価として「哀れの情に訴えることがなく人間感情を明快に割り切っている」と述べられることを再検討している。第四節「『呉越軍談』の構想と趣向」でも題材となった作品との比較を通して紀海音の趣向を明らかにし、本作では特に二つの趣向を展開させて観客を飽きさせないように工夫していたことを論じている。

第三章は「紀海音の浄瑠璃作者引退をめぐる」と題している。第一節「紀海音浄瑠璃作者引退に関する一考察」では紀海音が浄瑠璃作者を生業としていることを兄・油煙斎貞柳は快く思わず、彼らの仲は疎遠であったが、彼らもやがて和解し、それが紀海音の作者引退につながったと論じている。第二節「紀海

音浄瑠璃作者引退後の豊竹座」では、紀海音が引退したのちの豊竹座において余儀なくされた体制の変化を述べ、結局それが次代の人形浄瑠璃の発展につながったことを述べている。

最後に紀海音年譜を提示するように、本論文は紀海音の作品展開史を検証することから、近世浄瑠璃史ひいては日本芸能史の中での作者紀海音の存在意義を問い直し、従来の位置づけを高く評価し直しているのである。

## 論文審査結果の要旨

審査は2010年2月22日に行われたが、審査に先立ち、本博士学位申請論文の公開発表会を行った。審査委員以外にも5人の参加があり質疑がなされた。もちろん、その場での質疑応答も本報告には反映されている。

石田賢司氏の学位申請論文「紀海音の浄瑠璃の研究」は紀海音の浄瑠璃作品における文芸価値を評価することを目的としているとするが、近松門左衛門を意識し、彼以上の文芸性を見いだそうとするために、ともすれば、独善的になる評価も散見できる。もう少し、今日も舞台にかけられている紀海音をリメイクした菅専助の作品などへの影響を論じる方が論文の主旨からは説得性があったであろう。しかし、その一方で紀海音の全作品をよしとする大前提から論を進めていない姿勢が窺えることは冷静な作品分析として評価できる。

第一章第一節では歌舞伎狂言『心中鬼門角』と紀海音の浄瑠璃『袂の白しほり』が表現方法から比較されているが、あくまで、登場人物の感情を一語一語の表現から誠実に読み解こうとしている石田氏の姿勢は評価できる。しかしながら、例えば、「寝あぶら」という一語を多方面から分析し、「寝物語」として解釈することは斬新で面白い面があると言えるものの、貞門派として俳諧の道に学んだ紀海音を知るなら、付け合いなど俳諧的手法から分析する方法も提示されてもしかるべきではなかったかと言える。第二節「浮世草子と海音の浄瑠璃」では、紀海音『甲陽軍艦今様姿』が浮世草子『当世信玄記』を題材としていることを新たに指摘し、紀海音の趣向から解釈を深めていることは興味深い。しかし、これも同時代の「太平記読み」やいわゆる甲陽軍艦物の庶民への浸透も視野に入れて論じてもらえれば第一節の場合と同様ながら、より深い文芸性の解明につながったのではないかと指摘できる。第三節「竹本筑後掾の後継者問題と豊竹若太夫」で検証する竹本筑後掾没後の豊竹若太夫が取り立てられた経緯は、新たな資料提示などから実証性があり、説得性があるといえよう。

第二章は最も爛熟期を迎えた享保期の紀海音の浄瑠璃を『鎌倉三代記』、『愛護若時箱』、『義経新高館』、『呉越軍談』の四節に分け、その文芸性を丁寧に解明している。特に典拠や先行作品との関係を論じるにあたり、本文表現の摺り合わせを行っているが、この種の対校表を用いての分析は石田氏の真骨頂といえよう。また、単なる作品の読みからの文芸としての面白みだけではなく、紀海音が浄瑠璃という芸能として、当時の観客への効果も想定していたとする、その趣向に言及しているのは注目できる。しかし、ともすれば先行研究者の言説の検証の終始してしまっているところもあり、より積極的な自説の展開が求められる。さりながら、これらの論は石田氏が既に学会発表等を通して、学界に問うところであり、今後の研究動向の中で結論を出すべきであろう。

第三章は、紀海音の浄瑠璃作者引退と引退後の豊竹座をめぐる論であるが、この文学史的空白を「紀海音一両年休足」という記事だけから「引退」と解釈できるか問題が残る。総じて歴史的事象としての検証は難しいといえるが、石田氏の紀海音の出自、終焉、生業、兄・油煙斎貞柳との関係、狂歌などの他の文芸活動などから丹念に紐解く検証は、単なる推論には終わっていないと評価できる。特に大坂水帳資料から永田家と製菓業鯛屋との関係を明らかにし、紀海音の文芸活動にアプローチする方法は注視できる。

第三章に限らず全体的に、当時の浄瑠璃界の状況、文学的環境と庶民との関係、さらには芸能の地大坂と紀海音との関係までも広げて論を進めることが石田氏の今後の課題となるであろう。

以上、提出論文審査委員4名は、論文審査、口頭試問ならびに公開発表会の結果から、石田賢司氏が本論文によって博士（文学）の学位を受けるに値すると判断して、ここに報告申し上げる次第である。